



思うようになった。それで香港と、当時はまだシンガポールにもあったタイガーバームガーデンを撮りに行きました。三島由紀夫の『美の襲撃』という評論集に、タイガーバームガーデンがいかに悪趣味かが書いてあって、これだと思ったんです。

タイガーバームガーデンにバロックを見出したわけですね。〈聖なる世界〉はバロック的な建築やオブジェのほかに街のスナップと蟬人形の写真が混在するなど鑑賞者を幻惑する作品になっています。一日中スマホやタブレットの映像に触れていて、これが現実なのかイメージなのかも区別がつかないような世界に生きているという意味で、〈聖なる世界〉は非常に現代的だと思います。〈聖なる世界〉の後につくられた〈ロス・カプリチオス〉についてはどうでしょう？タイトルはスペインの画家、ゴヤの同名版画作品からですね。

堀田善衛が「朝日ジャーナル」に『ゴヤ』の評伝を連載していて(1973～76)、のちに全四巻の単行本になるんですけど、それを読んで思いついたんです。僕はゴヤの絵はあまり好きじゃないんですけど、エッチング(版画)はどれもいいと思うんですよ。〈ロス・カプリチオス〉にしても〈戦争の惨禍〉にしても。〈闘牛技〉〈妾〉もありましたね。四つの版画シリーズの中でも〈ロス・カプリチオス〉—— 気まぐれって意味ですが —— そのシリーズが、一番見ていて感動するんです。

怪物と人間が出てきて、それが当時の社会批評にもなっている作品ですよ。

写真の世界によく似ているんです。社会で起きている実際的な問題を拾い上げ、なおかつそれをゴヤ流のものへ変化させている。ゴヤが現実を違うものに異化したようなことが、写真もできるんじゃないかなと思いました。

今回展示される作品には〈ラスト・コスモロジー〉も入っています。ほかの作品とはすこし雰囲気の違い、天体がモチーフですね。

昭和天皇が亡くなったことがきっかけでした。僕たちの時代の、戦争の時代の象徴がなくなった。「今だ、このタイミングで天を撮っておかなければ」と思いました。それまで自分がやってきたのは地のことばかりで、天を見ていなかった

たという反省もありました。とにかく目の前にあるものを写そうとしてきましたから、ここで一度被写体に対して意識的になろうと思ったんです。

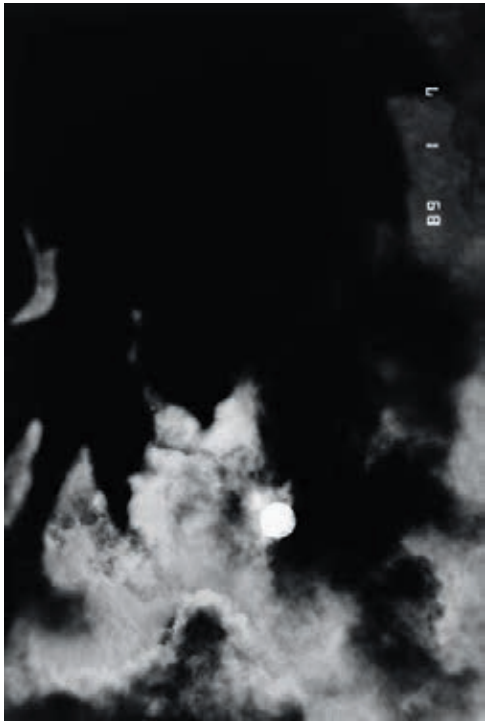
目の前にあるものを写すという姿勢は、今に至るまで川田さんの写真に共通するものでもあると思います。しかもその写真を合成したり、色を変えることで、新たなイメージをつくりだしています。

僕にとっての作品づくりはシュルレアリスムのオートマティズム(自動記述)に近いのかなと思いますね。

撮る時も、撮った写真を選んで構成する時にも、そんなにたくさんいろんなことを考えてできるのではなく、自分の中にある感覚の総体でしかない。その時に感動していなかったから撮っていないし、作品をつくっていないはずですから。

今現在つくっている作品では、二枚か三枚の写真を合成することが多いですけど、混ぜる時にも意識的にはしていないつもりです。なるべく無意識にやるからこそ、うまくいった時の驚きや感動がある。そうじゃないと面白くないですよ。

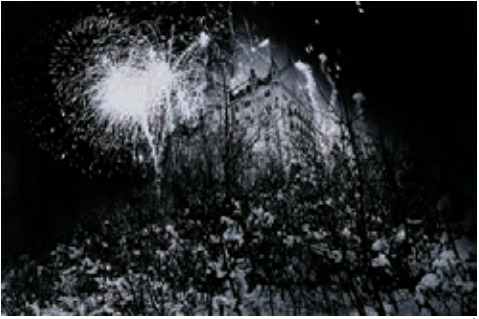
川田さんがInstagramで発表されている



東京都写真美術館総合開館30周年を記念する展覧会「作家の現在 これまでとこれから」では、当館の収蔵品をベースに近作を加え、作家の過去と現在のつながりにフォーカスを当てます。川田喜久治さんは出品作家5人の中でもっとも長いキャリアをもつ作家。初期の代表作〈地図〉からInstagramで発表している近作まで、作家としてどのような意識で作品づくりに取り組んできたかをうかがいました。

今年は「ゴジラ生誕70周年記念 ゴジラ・THE・アート展」(森アーツセンターギャラリー)に作品を出品され、フランスのアルル国際写真祭で大規模な個展「Endless Map – Invisible」を開催されています。そして本展では、これまでの作品から選ばれた代表的な作品と近作が展示されます。今回の作品のセレクトはいかがですか。

旧作については東京都写真美術館が収蔵しているものから選んでもらったんですが、面白いセレクトだと思いましたね。特に〈聖なる世界〉。これまでも過去の作品を振り返る展覧会は何度かしてきましたが、〈聖なる世界〉はあまり選ばれてこなかったんです。僕にとっては大事なセクションなので嬉しいですね。



作品や、写真集『Vortex』を見ていると、見慣れた光景とそっくりだけれど、その裏側を見ているようなザワザワした気持ちになります。毎日のように更新されていることにも驚かされます。

つくり続けるしかないんですよ。つくらない、撮らないというのは、結局終わりなんです。今も撮っていますし、コンピューターのおかげで以前に撮ったものも全部新しくつくり直すことができるので、材料はたくさんあります。ただ、1点をつくるのにやっぱり3時間くらいかかりますけどね。Instagramは実験ができるところがいいですね。ただ、まとめるということがなかなかできなくなりました。

1点1点の作品をつくることのほうを優先、という感じですか？

まとめる方向性がわからなくなってきたっていうのかな。自分でもわからない表現になってきたのかもしれない。あるでしょう、「わからな

川田さんの初期の代表作〈地図〉の次につくられたシリーズですね。〈地図〉は太平洋戦争の記憶にアプローチした名作でした。

〈地図〉から〈聖なる世界〉まで6年かかりました。〈地図〉が評価されたので、次の作品をつくるのがしんどくなってしまったんです。当時は若かったのでもうんなことを考えて、〈聖なる世界〉には「Sacré Atavism」という副題をつけました。Sacré はフランス語の「聖なる」、Atavismは英語で「隔世遺伝」という生物学用語です。綿々と続いてきたというよりひょっこり出てきてしまった。そこにバロックの精神が現れていると思ったんです。

〈地図〉が太平洋戦争の戦争遺構を題材にさせていただきに、川田さんを社会派と見る向きがあったと思いますが、〈聖なる世界〉は現実と虚構を行き来するような不思議な世界観ですね。

僕は社会派じゃないんですよ。そういう折り紙をつけられて久しいんですけど。若い頃に土門拳さんや木村伊兵衛さんのリアリズム写真に触れてきたのでその影響はあると思いますし、時代とパラレルに進んできたという意識はありますけどね。

たしかに〈聖なる世界〉から〈地図〉へとさかのぼって見ると印象がまるで変わります。戦争という事象ではなく、それを繰り返してきた人間の精神のあり方について考えたいくなります。

そんなに大げさなものでもなくて、〈聖なる世界〉の始まりは西方世界への憧れだったんですよ。特にバロック期の。古典主義に対して、装飾過多で悪趣味でさえあるバロックには、精神的に高揚した人間がどんなことをやってきたかが如実に表れているんです。それがイタリア・ボマルツォの怪物公園だったり、ルードヴィヒII世の城だったりするわけです。でも、いろいろ撮っていく中で、やっぱり東洋のものもあったほうがいだろうと



い表現をする表現」って。それが僕の「作家の現在」かもしれないですね。

(インタビュー:タカザワケンジ)

川田喜久治 [1]《地獄の入り口》〈聖なる世界〉より 1966年 ゼラチン・シルバー・プリント 東京都写真美術館蔵 [2]《黒い雨》〈The Map/Visions of the Invisible〉より 2024年 インクジェット・プリント [3]《基板迷路》〈ロス・カプリチオス〉より 1979年 ゼラチン・シルバー・プリント 東京都写真美術館蔵 [4]《花火とノイシュヴァンシュタイン城》〈ルードヴィヒII世の城〉より 1969年 ゼラチン・シルバー・プリント 東京都写真美術館蔵 [5]《昭和最後の太陽、昭和64年1月7日》〈ラスト・コスモロジー〉より 1989年 ゼラチン・シルバー・プリント 東京都写真美術館蔵 [6]《夕陽妄語》〈Los Caprichos, Near Far〉より 2022年 インクジェット・プリント

PROFILE 川田喜久治 Kawada Kikuji(1933-)

茨城県生まれ。1959年、写真家によるセルフ・エージェンシー「VIVO」を共同設立。1965年、戦争の傷跡や記憶をたどる『地図』(美術出版社)を発表。「ニュー・ジャパニーズ・フォトグラフィー」展(ニューヨーク近代美術館、1974年)や「川田喜久治展 世界劇場」(東京都写真美術館、2003年)、「アルル国際写真祭」(2025年)をはじめ、国内外で多数の展覧会に参加。2004年、芸術選奨文部科学大臣賞受賞。

撮影:田上浩一

総合開館30周年記念 作家の現在 これまでとこれから

TOP 30th Anniversary State of the Artist: So Far and From Now On

2 F 2025.10.15(水) → 2026.1.25(日)

東京都写真美術館は2025年に総合開館30周年を迎えました。1995年の総合開館から30年の間にもさまざまな表現が誕生し、社会の変化とも呼応しながら、写真表現の歴史は途切れることなく更新されています。「作家の現在」と題した本展で

〈出品作家〉石内都、志賀理江子、金村修、藤岡亜弥、川田喜久治

| 観覧料 | 一般700円ほか 各種割引あり
| 主催 | 東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館
| 協力 | 株式会社カラーサイエンスラボ、株式会社写真弘社、有限会社フォトグラファーズ・ラボラトリー、PGI

関連イベントは当館ウェブサイトをご覧ください

FESTIVAL

恵比寿映像祭2026

Yebisu International Festival for Art & Alternative Visions 2026
あなたの音に|日花聲音|Polyphonic Voices Bathed in Sunlight

会 期 2026年2月6日(金)～2月23日(月・祝)〔16日間〕(2月9日[月]および2月16日[月]は休館)※3F展示室のみ3月22日(日)まで

恵比寿映像祭2026は、多様な歴史を持つ言語から着想を得て、異なる言語や文化、記憶が影響し合う複層的な空間を構築します。私たちを取り巻く社会は、多様な声が交差しながらも、それぞれの存在が消されことなく共鳴し、視覚や聴覚を通じてポリフォニー(多声音)のように広がっています。今回の映像祭では、映像・写真、音、言葉、身体による表現の鑑賞体験を通して、不協和音を抱えたまま共にあることの複雑さと豊かさに触れ、互いに響き合う新たな関係性を見つめ直します。

|会場|東京都写真美術館、恵比寿ガーデンプレイス各所、地域連携各所ほか
|料金|展示無料(上映と一部イベントのみ有料)
|主催|東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館、日本経済新聞社
|後援|J-WAVE 81.3FM |協賛|東京都写真美術館支援会員
※事業は諸般の事情により変更することがございます。最新情報は当館ウェブサイトでご確認ください。



詳細はこちら▶



EXHIBITION

2F
2026 3/17 (火) 2026 6/7 (日)
W. ユージン・スミスとニューヨークロフトの時代
W. Eugene Smith and New York: The Loft Era

20世紀アメリカを代表する写真家、W. ユージン・スミス。報道写真家として広く知られる一方で、彼の視線には常に「芸術」へのまなざしがありました。本展では、とくに1950年代から70年代にかけてのスミスの活動に焦点を当てます。54年に『ライフ』誌を退いたスミスは、ニューヨーク・マンハッタンのアパート、通称「ロフト」に移り住みます。そこはジャズ・ミュージシャンや画家、写真家らが集う場となり、スミスは彼らの交流やジャム・セッションの様子を数多く撮影しています。本展では「ロフトの時代」とその前後の作品を紹介し、報道写真家にとどまらない新たな視点からスミス像を再考します。

W. ユージン・スミス《セルフ・ポートレイト》1957年頃 ©1957, 2025 The Heirs of W. Eugene Smith 画像提供: Center for Creative Photography, The University of Arizona: W. Eugene Smith Archive

|観覧料|一般700円 ほか 各種割引あり |主催|東京都、東京都写真美術館
※事業は諸般の事情により変更することがございます。最新情報は当館ウェブサイトでご確認ください。



フロムトップ 1F / CAFE

温かいチャイをかけながらお召し上がりいただく「いちごとチャイのパフェ」。途中お好みで黒胡椒を挽いて、スパイス感を足してお召し上がりいただけます。チャイは冷たいものに触れると固まるので、食感の変化もお楽しみいただけます。

[営業時間] 10:00-18:00(木・金は20:00まで)
[TEL] 070-8591-3730 [定休日] 美術館の休館日に準じます



1,800円(税込)

NADIFT BAITEN 2F / SHOP

展覧会の開催に合わせて、品揃えがガラリと変わるミュージアム・ショップ。読書好きの方にぴったりのクリアブックカバー。本の表紙を隠さずに、本自体も守ってくれるデザインとなっています。



[営業時間] 10:00-18:00(木・金は20:00まで)
[TEL] 03-6447-7684
[定 休 日] 美術館の休館日に準じます

図書室 4F / LIBRARY

関連図書コーナーでは、開催中の展覧会に関する貴重な書籍や、出品作家の写真集などを特集しています。展覧会をご覧いただいた後は、ぜひ図書室へもお立ち寄りください。

[臨時休室について] 閉架書架の修繕工事のため、下記の期間、臨時休室します。
2026年1月15日(木)～2月27日(金)



[開室時間] 10:00-18:00
[休 室 日] 美術館の休館日、特別整理期間等

支援会員

次の企業・団体のみなさまに東京都写真美術館の活動を支援会員様としてご支援いただいております。

特別賛助会員 キャノン(株) 全日本空輸(株) (株)ニコン	朝日新聞社 (株)朝日新聞出版 朝日生命保険(相) (株)アフロ (株)アマナ (株)岩波書店 (株)潮出版社 (一財)AVCC・霞が関ナレッジスクエア(KK ²) (株)エージーピー SMBC日興証券(株) SB C&S(株) (株)NHKエデュケーション (株)NHKエンタープライズ (株)NHK出版 (株)NHKテクノロジーズ ENEOSホールディングス(株) エルメス財団 OMデジタルソリューションズ(株) カルツァイス(株) 花王(株) 鹿島建設(株) カトーレック(株) (株)KADOKAWA 神奈川新聞社 カルチュア・コンビニエンス・クラブ(株) (株)企業変革創造 (株)キクチ科学研究所 (株)浅沼商会 (株)朝日工業社	(株)紀伊國屋書店 ギャラリー小柳 共同印刷(株) (一社)共同通信社 空港施設(株) (株)久米設計 グローリー(株) (株)ケー・アンド・エル グッツァイメーゼスジャパン(株) 興亜硝子(株) (株)弘亜社 (株)公栄社 (株)廣済堂 (株)講談社 (株)光文社 (株)国書刊行会 (株)コスモスインターナショナル 小山登美夫ギャラリー(株) 佐川印刷(株) 三菱オプリー(株) 産経新聞社 サンリーホールディングス(株) (株)ジェイアール東日本企画 (株)JTБ (株)シグマ (株)実業之日本社 信濃毎日新聞社 清水建設(株) (株)写真弘社 写真の学校／東京写真学園 シャネル(同)	(株)集英社 シュッピン(株) (株)小学館 松竹(株) 信越化学工業(株) (株)新潮社 (株)晋遊舎 (株)スタジオエムジ (株)スタジオジブリ (株)SUBARU 住友生命保険(相) (株)住友倉庫 (株)生活の友社 セイコグループ(株) 双日(株) ソニー(株) 損害保険ジャパン(株) 第一生命保険(株) 台新国際商業銀行 大和証券(株) (有)タカ・イシイギャラリー (株)高島屋 (株)竹中工務店 (株)タニタ (株)タムロン (株)丹青社 (株)中央公論新社 中外製薬(株) (株)築地製作所 T&Dフィナンシャル生命保険(株) (株)TBSテレビ	(株)デサン (株)テレビ朝日 (株)テレビ東京 (株)電通 東亜建設工業(株) 東映(株) (株)東京印書館 弁護士法人東京笠井法律 総合事務所 東京工科大学 / 日本工学院 東京工芸大学 東京新聞・中日新聞社 東京総合写真専門学校 (株)日本デザインセンター 日本ヒューム(株) (株)ニッポン放送 (株)日本デザインマネジメント(株) 日本空港ビルデング(株) 日本経済新聞社 (株)日本広告写真家協会 日本写真印刷コミュニケーションズ(株) (公社)日本写真家協会 (公社)日本写真協会 日本写真芸術専門学校 日本生命保険(相) 日本芸術学部 日本ロレックス(株) 野村證券(株) (株)ハーツ (株)博報堂	(株)トータルメディア開発 研究所 (株)徳間書店 戸田建設(株) (株)トロマンマネジメント (株)ニコンイメージング ジャパン 日油(株) 日活(株) 日機装(株) 日光ケミカルズ(株) 日本貨物航空(株) (株)日本デザインセンター 日本ヒューム(株) (株)ニッポン放送 (株)日本デザインマネジメント(株) 日本空港ビルデング(株) 日本経済新聞社 (株)日本広告写真家協会 日本写真印刷コミュニケーションズ(株) (公社)日本写真家協会 (公社)日本写真協会 日本写真芸術専門学校 日本生命保険(相) 日本芸術学部 日本ロレックス(株) 野村證券(株) (株)ハーツ (株)博報堂	(株)博報堂プロダクツ (株)ハセガワエスティ パナソニックホールディングス(株) (株)パラゴンホールディングス (株)バンダイナムコフィルム ワークス ぴあ(株) ビー・マックス(株) 北海道 写真の町東川町 (株)美術出版社 (株)ビックカメラ (株)ピラミッドフィルム (株)ファーストリテイリング (株)フェドラ (株)フォーカスシステムズ (株)富士通パースナルズ (株)フジヤカメラ店 芙蓉総合リース(株) (株)フレームマン プロフォト(株) (株)文化工房 (株)文藝春秋 北海道新聞社 (株)ホテルオークラ東京 堀江車輦電装(株) 本田技研工業(株) 毎日新聞社 丸善雄松堂(株) マルミ光機(株) (株)マダム (株)みずほ銀行	三井住友海上火災保険(株) 三井倉庫ホールディングス(株) 三井不動産(株) 三菱製紙(株) 三菱電機(株) 明治安田生命保険(相) 森ビル(株) ヤマト運輸(株) (株)吉野工業所 (株)ヨドバシカメラ 読売新聞社 ライオン(株) ライカカメラジャパン(株) (株)リビタ (株)良品計画 (株)ロボット (株)ワコウ・ワークス・オブ・アート (株)ワコール ※ほか 2法人1名様 (令和7年11月現在・五十音順)
--	--	---	--	---	--	---	---

(株)=株式会社、(相)=相互会社、(有)=有限会社、(公社)=公益社団法人、(同)=合同会社、(一社)=一般社団法人、(一財)=一般財団法人

東京都写真美術館
TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM

〒153-0062 東京都目黒区三田1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内
[TEL] 03-3280-0099 www.topmuseum.jp



東京都写真美術館

開館時間 10:00-18:00(木・金は20:00まで、1/2は18:00まで) ※入館は閉館30分前まで
休 館 日 毎週月曜日(月曜日が祝休日の場合は開館、翌平日休館)、年末年始(12/29-1/1)、1/26-2/5

公式ウェブサイト



SCHEDULE

3F	2F	B1F	1F
総合開館30周年記念 遠い窓へ 日本の新進作家 vol.22 画 9.30(火) - 2026.1.7(水)	総合開館30周年記念 作家の現在 これまでとこれから 画 10.15(水) - 2026.1.25(日)	プリビクテ Storm/嵐 画 12.12(金) - 2026.1.25(日)	1F上映および展覧会の 最新情報はこちら▼
恵比寿映像祭 2026 2.6(金) - 2.23(月・祝)			
3階展示室のみ 2.6(金) - 3.22(日)	W. ユージン・スミスと ニューヨーク ロフトの時代 画 3.17(火) - 6.7(日)	APAアワード2026 画 2.28(土) - 3.15(日) 小樽山賢二(予定) 画	東京都内の美術館・博物館等を お得に見られる「ぐるっとパス」 詳細はこちら▼
画 企画展 画 収蔵展 画 誘致展			

NEWS

TOPのお正月2026

1月4日(日)来館者プレゼントあり!

2026年は1月2日から開館します。雅楽の演奏や、新春ギャラリートークなど、新年のイベント盛りだくさんでお待ちしています。



新年雅楽

新春ギャラリートーク

2階展示室「作家の現在 これまでとこれから」展
[日時] 1月2日(金) 16:00 - [解説] 伊藤貴弘(当館学芸員)
3階展示室「遠い窓へ 日本の新進作家 vol.22」展
[日時] 1月3日(土) 14:00 - [解説] 大崎千野(当館学芸員)

とっぷ雅楽

[日時] 1月2日(金) 13:00 -、15:00 - (各回約20分)
[場所] 2階エントランスロビー
[出演] 橋雅友会 ※笙、箏、龍笛(3名)の演奏

暗室で現像体験ができるオープンワークショップを開催します!

デジタル画像をもとにしたネガで、モノクロ写真をつくります。今まで美術館に来たことがない方、写真をつくったことがない方も大歓迎です。暗室で現像を体験してみませんか。申込不要、当日ご自由にご参加いただけます。
[日時] 2026年1月12日(月・祝) 13:30-17:00 |参加費|無料

詳細はこちら▼



東京都写真美術館の広報誌別冊「ニアイズ」

普段の美術館ではなかなか見られないとっておきのエピソードが詰まった、ちょっと変わった漫画の小冊子。美術館の仕事の裏側やスタッフたちの素顔を紹介しています。WEBでバックナンバーもご覧いただけます。

バックナンバーはこちら▼

